姫と牢屋と親友と

美衣花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
姫と牢屋と親友と

【Ｎコード】
Ｎ０３３３Ｏ

【作者名】
美衣花

【あらすじ】
　中学校に入学して早々、いじめのリーダーの顔を持つクラス委員長にいじめられ、部屋に引きこもりつつ復讐のチャンスを待ち望んでいる鈴花とそんな鈴花を心配する親友、泉。復讐の憎悪を燃やす鈴花を、泉は止めることができるのか・・・。
二人の少女の目線で描く、憎しみと友情のストーリー。

プロローグ（前書き）

はじめまして　美衣花と申します。

私、美衣花が書く初めての作品は友情物語です。
ドロドロとした話かもしれませんが、皆様に読んで頂ければこれ幸いです。

それでは、片手に携帯、片手にココア（？）でごゆるりとお楽しみくださいm（＿＿）m

プロローグ

木崎原鈴花。私の名前だ。

個会社の社長の一人娘で、裕福とまではいかないが、両親の愛情を十分に受けられる幸せな家庭に育った。

学校でも友達が多く、毎日が幸せだった。

しかし、そんな幸せが一瞬にして崩れ去ってしまった。

中学校進学を機に、私はいじめを受けるようになった。

いじめが始まったのは入学式から三日。私が親友三人と一緒に教室を掃除している中、あるグループだけがペチャクチャとおしゃべりをしていて全く掃除をしていなかったのだ。

私は真っ先にそのグループの人達に注意した。

まさか、それがいじめられる原因になるなんてその時は考えもしなかった。

迂闊にも、その時私が注意したグループのリーダーが真崎さんだったからだ。

真崎(まさき)望実(のぞみ)。当時私のクラスの中で一番いじめっ子だった。
両親が金持ちで学校には真崎さんの取り巻き達が大勢いる。成績優秀でクラス委員長を努めていて、先生受けが良く、教師達は彼女を信頼している。だからこそ、教師達は気づいていないのだ。

彼女の本当の顔を。

教師の前では優等生の顔をしていて、教師の目の届かない所では悪質き回りないいじめっ子だ。
彼女の機嫌ひとつでいじめられっ子は次々と変わっていく。ちょっと彼女に刃向かえば、たちまちいじめの標的にされる。だからみんな、彼女の機嫌を損ねないようにご機嫌をとっている。彼女の取り巻き達も、きっとそう思っているに違いない。

でも、私はそれに気づくことができず、次の日からいじめの標的(ターゲット)になってしまった。

『死ね』『消えろ』などの尽きることのない悪口。ボロボロにされる靴や鞄。悪口で埋めつくされる机やノート類。放課後お決まりの暴力タイム。

他にもいろんないじめをされたが、もう内容なんて思い出せない。そのくらい、私の体と心はボロボロだった。

両親や教師にもいじめられていることを相談できぬまま、毎日毎日いじめられていく中、真崎さんを恐れているのか、親友達はどんどん離れていく。私は完全にひとりぼっちになってしまった。

入学してから一ヶ月も経たない内に、私は学校に行くことを止め、自分の部屋の中に引きこもるようになった。

突然部屋から出て来なくなった私を両親は心配し、私に食事や欲しい物を与えるなど、いつもと変わらぬ愛情を注いでいた。そして、いつか私がまた元気に学校に行ってくれることを願っているに違いない。

しかし、私はそんな気はさらさらなかった。

またあんな地獄のような日々に戻るなんて、考えただけで吐き気がする。

私は部屋のドアの鍵をかけ、ひたすら引きこもり続けた。

カーテンは閉め切り、部屋の電気も着けず、机に向かってノートにいじめられていた頃のことを下記つづった。

いじめられていた頃の痛みと憎しみ。私はノートに穴が空くんじゃないかってくらいに書きなぐった。

いつか復讐してやる。

私をいじめた真崎やその取り巻き達。いじめを見て見ぬふりをしていた教師達。そして、私を裏切った奴ら全員。絶対、復讐してやる。

泉1

『木崎原ー・・・・・・木崎原は今日も休みか。』

自分のクラスの生徒の出席を確認する担任の前原先生。前原先生は、鈴花の不在を確認すると、すぐに次の子の出席を確認した。

鈴花が登校して来なくなってから、今日で二ヶ月が経った。私は二つ前の鈴花の席を見る。そこには、鈴花が椅子に座って笑っている姿が目に映った。

『流川ー。流川泉！』

先生に名前を呼ばれ、私は慌てて返事をした。

私は流川(るかわ)泉。鈴花とは幼稚園の時からの幼なじみだ。

どこへ行く時もいつも一緒で、ケンカする時もあったけど、すぐに仲直りする程仲良しだった。なのに・・・。

私は真崎さんにいじめられるのが怖くて、いじめられている鈴花から離れた。すぐにでも話しかけようと思ってたのに、体が動かなかった。

鈴花が学校に来なくなったから、私は後悔した。

なんで私は鈴花を見捨てたんだ。鈴花は親友なのに・・・。

私はそれから、鈴花にメールや電話をしたり、鈴花の家にも行ったりした。

しかし、鈴花は私を受け入れてくれなかった。当然だ。親友を見捨てた私なんかを、鈴花が受け入れるはずがない。天罰が下ったんだ。

鈴花がいなくなってからのクラスは、相変わらずだった。

鈴花がいなくなり、真崎さんはまた新たにターゲットを変えた。クラスの中で一番大人しく、気弱い女の子、上田さんだった。

真崎さん率いるいじめ軍団は、上田さんにバスケットボールを投げつけている。上田さんが泣きながら許しをこうているにも関わらず、真崎さんは何度も何度もいたぶっている。

『またか。もういい加減にしてほしいよね。』

私とよく一緒にいる美樹が、真崎さん達に聞こえないくらいの小さい声でボソリと話す。

私もそうは思ったものの、どうすることもできない。真崎さんに逆らったら自分もあんな目に・・・。

私は教室を飛び出し、トイレへと駆け込んだ。壁に寄りかかって、スカートのポケットの中に入っているピンクの携帯を取り出し、電話帳を開いた。

私はこうして毎日、鈴花にメールしていた。返事が返って来ないことはわかっていても、やっぱり親友だから放っておくわけにはいかない。

『やっほーo（^o^）o
鈴花、元気?
ご飯ちゃんと食べてる?
気が向いたらでいいからメールしてくれたらうれしいなー（^o^）／』
　私はメールを送信した。送ってすぐに、携帯の端に涙がこぼした。
『鈴花・・・・。ごめんね・・・・・。』
　私は授業開始のチャイムが鳴ってるにも気づかず、ひたすらトイレの個室で泣いていた。

鈴花1

真っ暗な部屋。ピンクのカーテンが太陽の光を遮る。部屋中食べ物のゴミや脱ぎっぱなしの服で散らかっている。
私はふかふかの羽毛布団の中にくるまって、部屋にある小型テレビをつけてビデオを見ていた。いじめ問題がテーマで些細なきっかけから始まったいじめに立ち向かう女の子の成長物語だ。
私はテレビの電源を消した。いじめられていた頃のことを思い出してしまったのだ。
毎日毎日尽きることのない嫌がらせと暴言。地獄のような日々。傷だらけの・・・・・

『いやあああああ』

私はビデオテープをデッキから取り出して、テープを床に投げつけ、何度も踏みつけた。テープの表面にひびが入り、テープはボロボロになってしまった。
それでも私の怒りは収まらず、部屋中のものを壁に投げつけた。ぬいぐるみや食べ物の容器、クッションなど、いろんなものを投げ続けた。
携帯も投げつけようとした時、メールの受信のメロディが流れた。
誰だろう・・・。

　私は携帯を開き、受信ボックスを確認した。泉からだった。
　このところ、泉から毎日のようにメールが届く。でも、私は返信をする気はなかった。自分を裏切った奴のメールなんか見たくもなかった。
　私は泉から来たメールを削除すると、壁に思い切り投げつけた。携帯は鈍い音を立て、電池パックが外れる程の衝撃だった。
　私はコンビニのビニール袋の中から栄養ドリンクを取り出し、キャップを外して一気に飲み干した。ビンを床にポイ捨てて、私は布団の中に潜り込んだ。

泉2

二階の女子トイレの個室。洋式の便器の蓋の上に座る私は、鈴花からのメール返信を待ち続けた。私は、携帯の蓋を何度もパカパカ開いては受信ボックスを確認した。

しかし、私の期待とは裏腹に、鈴花からのメールは一向に来なかった。

授業終了のチャイムが鳴った。私はトイレから出て、教室に戻った。これで授業をサボったのは今日で五回目だ。

教室に戻ると、真崎さん達が上田さんの周りをぐるっと囲み、チョークの粉で真っ白に汚れた黒板消しを投げ続けた。上田さんの紺色の制服はチョークの粉で真っ白になっていた。

私は真崎さんに気付かれないように、こっそりと自分の席に戻ろうとした。しかし、真崎さんはそんな小さなことも見逃さなかった。

真崎さんは私の肩を掴み、私の耳元でこう言った。

『ねぇ、流川もやろうよ。』

全身から冷や汗がどっと出た。
思いも知らない事態に私はどう対応したらいいかわからなかった。そんな私のことはそっちのけで、真崎さんは私の腕を引っ張り、上田さんの前まで連れていく。上田さんは捨てられた子犬のように怯え、今にも泣きそうな目で私を見る。
『上田さん、汚れちゃったから綺麗にしてあげて。』
真崎さんは取り巻き達に目配せをすると、取り巻きの一人がどこからか水の入ったバケツを持ってきた。真崎さんの指示で、取り巻きは持っていたバケツを私に渡した。
やれと言われていることはわかった。この水を上田さんにかけろということだった。
『どうしたの？早くやりなよ、流川。』
真崎さんは私の背中を小突く。
『そんなことしちゃいけない。いじめなんて卑怯なことしちゃだめ！』

『やらないと自分もいじめられるんだよ。それでもいいの？』

今、私の頭の中では二つの思考が戦っていた。一つは、いじめをしてはいけない心。もう一つは、刃向かえば自分もいじめられてしまうという心。どちらも選べなかった。

私はふと、上田さんの顔を見た。いじめられていた頃の鈴花とだぶって見える。

私は怖くなった。もしかしたら、明日からのいじめのターゲットは私に・・・・。

そんなの嫌だ！！

『うわあああああ』

私はバケツを思い切り降り下ろすと、中に入っていた水は上田さんに命中した。上田さんは全身びしょ濡れで、髪や顎から雫が垂れ落ちる。その中に涙も混じっていた。

真崎さんは私の肩に肘を置く。

『流川。あんたもけっこうやるね。』

私ははっと我にかえった。私の手からバケツが落ちた。

私・・・今・・・何をしたの・・・？

私も・・・いじめをしてしまった・・・。

私は急に涙が溢れてきて、ものすごい勢いで教室を飛び出した。教室から聞こえてくる真崎さん達の笑い声に、私は耳をふさいだ。

再びトイレに駆け込んだ私はトイレットペーパーをガラガラと勢い引っ張り出し、溢れ出る涙と鼻水を拭き取った。そして、自分のしたことに深く傷つき、その場で崩れ落ちる。

私はなんてことをしてしまったたんだ。自分も真崎さんのように卑怯なことをしてしまうなんて・・・。

私は次の授業開始のチャイムが鳴っているのにも気づかず、泣き崩れていた。

授業サボり、これで六回目・・・。

鈴花２

午後一時。私は母が作ってくれた温かいピラフと野菜サラダとフルーツヨーグルトのお昼ご飯を食べていた。私は布団を被ったまま、お昼ご飯の食器を乗せたお盆をベッドの上に置き、正座したままお昼ご飯を食べる。ベッドの周りは着替えたパジャマや読みかけの雑誌で散らかっていた。

ピラフを食べようとスプーンを近づけると、視界に痣だらけの腕がパジャマの裾から出ているのが移った。この痣は、真崎にボコボコに殴られた時につけられたものだ。

その痣を見た瞬間、いじめられていた頃の記憶がフラッシュバックして蘇ってきた。あの頃の怒りと悲しみが・・・。

私はお盆を振り払った。お盆と食器はガチャンッと音を立てて落ち、食べかけのピラフやヨーグルトが白いカーペットの上にこぼれる。

私は肩で息をした。

絶対復讐してやる！私を傷つけた連中、全員殺してやる！！

復讐に火を燃やした私の目の前に、あるものが移った。それは、毎月買っていたお気に入りの雑誌の折り込みチラシだった。

『あなたの怨み・憎しみ、これで晴らせる。怨みネットへGO！』

「怨みネット？」

私はそのチラシを手に取り、チラシの内容を目で追っていく。内容は、自分が抱えている怨みや憎しみを掲示板に書き込むツイッターのようなものだった。

ちょっとやってみようかな・・・。

私は興味半分でそのネットをやってみることにした。私は机の上に置いてあるパソコンの電源を着け、早速そのネットにアクセスした。

画面は血でコーティングされた不気味なサイトだった。画面の真ん中に大きく、

『怨みネットへようこそ！』

と書かれていた。

私は画面をスクロールしていくと、一番下に会員登録の欄があった。私は早速登録欄に、名前と住所、年齢を記入し、登録を済ませた。

登録が完了すると、最初の画面と少し違って、タイトルの下に過去に登録された人達の書き込みがズラリと並んでいた。その下に、『書き込む』というボタンを見つけ、早速そのボタンをクリックした。

それから三十分後。私はいじめられていた頃の記憶を掘り返しながら、次々と書き込んでいった。

泉3

土曜日。私は鈴花の家の前にいた。

私は毎週欠かさず、鈴花の家に遊びに行っている。小さい頃はよくお互いの家にかわりばんこで遊びに行った。鈴花はいつも、母親が作ってくれたというお菓子やパンを持ってきていた。私はそれがすごくおいしかったのをよく覚えている。

しかし、今の鈴花はあの頃の鈴花と違っていた。私が家に訪ねても、鈴花は受け入れてくれず、いつも鈴花のお母さんに追い返される。ひどい時には、二階の部屋から目覚まし時計やガラスのコップが落ちてきたこともあった。

また今日も追い返されるに違いない。

私は鈴花の家に背を向けて帰ろうとした。その時、

「泉！」

鈴花の声だ。

私は後ろを振り返ると、鈴花が二階の窓からこちらを見ていた。鈴花はパジャマ姿のままだった。

「泉、上がってきてもいいよ・・・。」

私は何ヵ月ぶりかの鈴花の部屋にびっくりした。部屋の扉を開けた瞬間、辺り一面がゴミの山だったからだ。

食べかけのスナック菓子やチョコレートがテーブルの上に置かれ、チェックや花柄のパジャマがそこらへんに脱ぎ散らかしてある。お菓子の袋やジュースの空き缶が入ったビニール袋からはひどい悪臭が漂っている。不思議なことに、机の上だけが綺麗に片付いていて、一台のパソコンが起動しっぱなしだった。

「適当に座っていいよ。お菓子もあるから、食べていいよ。」

そういうと鈴花は、私の前にポテトチップスの袋とペットボトルに入ったコーラを置くと、鈴花は布団の中に潜り込んだ。

「鈴花？具合でも悪いの？」

「夜遅くまでパソコンやってて寝不足なの。しばらく寝かせて・・・。」

布団の中から鈴花のか細い声が聞こえてくる。私は仕方なくコーラを一口飲んだ。その時、

「ピロリーンッ」

パソコンの方からなにやら音がした。鈴花は布団から跳ね起き、すぐさまパソコンに向かった。パソコンのキーボードをカタカタと打っている鈴花は、どこか不気味な笑みを浮かべていて、私はゾッとした。

「鈴花、何してるの？」

「怨みネットっていうサイトの掲示板に書き込みをしてるの。」

「怨みネット？」

「怨みや憎しみの感情をこのネットに書き込んで、ネット仲間とこうしておしゃべりするの。」

鈴花は私の顔を見ずに、パソコンの画面に夢中だった。

私はパソコンの画面を見た。そこには画面いっぱいに書き込みがされていた。中には『〇〇死ね』や『あの女、許せない！』など、

恐ろしい書き込みも書かれていた。

「泉もやる？面白いよ。」

鈴花が私の方を向いた。今日初めてちゃんと見た鈴花の顔は恐ろしかった。パソコンの光のせいでもあるが、目にはくまがくっきりとできていて、顔色も悪く、とても不気味だった。

「いい。私、こういう怖いものは苦手だから。」

その時、足に何か当たった。下を見ると、それは電池パックが外れた鈴花の携帯だった。

「鈴花、携帯どうしたの？これ、電池パック外れているよ？」

鈴花はすでに自分の世界に入っているため、返事を返してはくれなかった。

「・・・私、帰るね。また、遊びに来るから。」

私は鈴花の母親に挨拶をして、木崎原邸をあとにした。

鈴花3

午前二時。私はひたすら掲示板に書き込みをしていた。昼間に泉が遊びに来て帰ったあとから、ずっと掲示板に夢中だ。

私はキーボードをカタカタを打ちながら、ジュースを飲んだり、お菓子を食べたりした。パソコンの周りには、ペットボトルのジュースやお菓子の袋で埋めつくされていた。

私はネット仲間の書き込みも見てみることにした。『友達の書き込み一覧』というボタンをクリックすると、書き込みの中に私の掲示板を見たという人の感想やコメントが書かれていた。

『鈴花さんの書き込み、見ました。鈴花さんはとても辛い思いをしていたんですね（T＾T）』

『僕もいじめられています。鈴花さんの気持ち、すごく分かります。』

『いじめられて不登校で苦しんでいる私は、鈴花さんの書き込みにすごく共感しました。私もいじめた奴らに復讐したい気持ちでいっぱいです。』

自分の書き込みを誰かが見て、そして共感してくれている。私は思わず笑みがこぼれる。

ネットの世界とはいえ、自分がカリスマになったような気持ちが良かった。書き込みの足跡はたった一週間で十万件を越え、コメントは一万通を越えていた。

私はオレンジジュースを一気飲みすると、ある書き込みが目に止まった。

『鈴花さん、最近怨みネットの間の噂で気になるサイトを見つけました。このサイトでなら、鈴花さんの怨みはきっと晴らせると思います。サイトのホームページを載せるのでもしよかったら見てみてくださいｏ（＾ｏ＾）ｏ』

私はこの書き込みの下にあるサイトのホームページにクリックした。すると、画面が突然真っ黒になり、不気味なイントロが流れてきた。そのすぐあと、画面の真ん中からうっすらと文字が浮かび上がってきた。

『呪いのサイト～憎い相手をこれで・・・～』

「なんか気味悪・・・。」

さすがの私でも、『呪い』という単語には弱く、すぐさまその

サイトを閉じた。
私はもう一度怨みネットのサイトに戻り、呪いのサイトの噂というのを調べてみることにした。
　サイト仲間に『呪いのサイトの噂って何ですか？』と書き込み、返信を待った。待つこと五分。返事をくれたのは、さっき呪いのサイトの紹介をしてくれた『由美子』という人からだった。

『呪いのサイト噂というのは、呪いのサイトのホームページの書き込み欄に呪いたい相手の名前と、どんな呪いをかけたいかを書き込むと、そのとおりに相手は呪われるっていう話なんだ。鈴花さんも呪いたい人間がいたら、是非この噂を試してみたら？／（ˋ▽ˊ）／』

　私はメールを全部読み終えると、パソコンの電源を消して布団の中に潜り込んだ。

　あほらしい。本当に呪いなんかあるのかな・・・。

　私はいつの間にか眠りについていた。

泉4

私の毎日は平凡だ。

朝七時に起きて、八時頃学校に向かう。

教室に入れば、いじめのリーダー真崎さんとその取り巻き達が一人のクラスメイトをいじめる。私はいじめが行われているその空間が嫌で、休み時間になると教室を抜け出してはトイレや屋上で時間を潰す。放課後は下校のチャイムと同時に帰る。休日は鈴花の家に遊びに行く。そんな毎日を過ごしていた。

そんなある日。私は放課後、真崎さんに呼ばれた。話があるから屋上に来いと言われついて行くと、真崎さんの取り巻き達が数十人余り集まっていた。

「話って何？真崎さん。」

私は真崎さんに聞くと、真崎さんは私の腕を引っ張り、前に突飛ばした。私は顔面から地面に落ち、膝を擦りむいた。顔を上げると、いつの間にか私は取り巻き達に囲まれていたのだ。

真崎さんは私の髪を引っ張り、睨み付けて言った。

「お前さ、何木崎原と仲良くなってんだよ？」

いつもの優等生の顔は消え、鬼のような顔で私を見る真崎さんに、私は完全に言葉を失う。すると、真崎さんは自分の派手にでこった携帯をスカートのポケットの中から取り出し、画面を私の方に向けた。

「こ、これ・・・。」

私は唖然とした。それは、私が鈴花の家から出ていく瞬間の写真だった。いつの間にこんな写真が撮られていたんだ・・・。

真崎さんは再び携帯をポケットにしまうと、私の制服の襟をぐいっと掴んだ。

「私前々からあんたのことムカついてたんだよね？いつも教室にいなくてつまんない奴だし、おまけに不登校になった奴と仲良くしてるし。見てて吐き気がしてくるんだよね！」

真崎さんはまた私を突き飛ばすと、倒れた私を強く踏みつけた。私は思わず、うっと鈍い声を上げた。

「これからは、あんたがいじめのターゲットだからね！」

真崎さんがそう宣告すると、取り巻き達は歓声の声を上げた。

夢にも思わなかった。私がいじめられるなんて・・・。

次の日から、いじめのほこさきは私へと変わった。朝から晩まで続く暴力と嫌がらせ。いじめっ子達の嫌みな笑い声。いじめられている私を見て見ぬふりするクラスメイト達。

私の心は完全に壊れていった。

鈴花4

六月のある土曜日。私はいつものように怨みネットの掲示板に書き込みをしていた。休む間もなくキーボードをカタカタを叩いていると、玄関のインターホンが鳴った。

泉だった。私は泉を中に入れた。このところ、泉と一緒にいるのが楽しくなった。最初は疎ましいと思っていたのに、今ではあの頃と変わらず接している。

今日はお母さんが婦人会に出席しているため、家には私一人しかいない。私はキッチンの戸棚からガラスコップを取り出し、冷蔵庫からオレンジジュースとロールケーキを用意した。

自分の部屋に入ると、私はジュースとロールケーキを載せたお盆をテーブルに載せ、コップにジュースを注いでいると、泉の腕に痣があるのを見つけた。

「泉、その腕どうしたの?」

「あ、これ?この前体育で転んでつけたんだ。私ってドジだよね。」

泉は笑いながら腕を花柄のワンピースで隠した。私はまさかと思い、泉に近づいた。

「泉。まさかあんた、真崎達にいじめられてるの？」

これはいじめられていた人間の勘だった。私もいじめられていた頃、よく腕に痣をつけられていたのを覚えている。

すると、泉の目から涙が一粒こぼれる。泉の顔はどんどん悲しそうな顔をし、私の腕の中で泣き崩れた。

しばらくして、泣き止んだ泉は私にいじめられていることを全部話した。真崎は相変わらず、クラスメイトを傷つけているようだ。

許せない。私だけじゃなくて、親友の泉までいじめるなんて・・・。

私は泉の肩を掴んだ。

「大丈夫だよ泉。私が泉を助けてあげるから。」

「鈴花・・・ありがとう・・・。」

その夜。私はこの前知った呪いのサイトを開いた。もし呪いのサイトの噂が本当だとしたならば、真崎達を懲らしめることができるかもしれない。

私はその日一晩中、呪いのサイトにひたすら書き込みをしていた。

鈴花４ｐａｒｔ２（前書き）

編集不都合により、急きょｐａｒｔ２を作りました？すみません？？？

鈴花4part2

私が呪いのサイトに書き込みを始めてから、一週間が経った。

いつものように、土曜日に泉が遊びに来て、真崎達のいじめ情報を聞くが、相変わらずのようだった。

その日の夜。私は呪いのサイトに書き込んだ内容を確認した。

『いじめのリーダーの真崎。その取り巻きの藤井、西内、中野、前川。その他いじめに関わっていた奴ら全員死ね！！！』

ここの掲示板に書き込んだ内容は本当に起こるとあったのに、泉の話だと起こってないようだ。

「やっぱり噂は嘘だったのか・・・。」

私はすっかり騙されたと思い、サイトを閉じようとしたその時、メールが一通届いた。『由美子』からだった。

『呪いのサイトの噂で、新たな情報を見つけました。呪いのサイトで本当に起こってほしい内容を送信する時には、午前0時ちょうどじゃないとだめらしいです。注意してください（；＿；）／～～～』

私は時計を確認した。時間は０時五分前。まだ間に合った。私は急いで書き込みを済ませ、午前０時になるのを確認すると０時ぴったりに送信した。

これで本当に私の怨みを晴らせるのか・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0333o/

姫と牢屋と親友と

2010年10月9日05時11分発行